小学校図画工作科において作品のよさや美しさを感じ取る力を育てる学習指導に関する研究

－作品との対話型の鑑賞活動をとおして－

一戸町立一戸南小学校　教諭　**荒木　眞智子**

Ⅰ　研究目的

小学校図画工作科の鑑賞の学習においては、児童が作品などを進んで鑑賞し、そのよさや美しさを感じ取り、感性を高めるとともに、それらを大切にする態度を育てることが求められている。したがって、鑑賞活動では、児童が作品などを関心をもって見ていくようにするとともに、一人一人の感じ方や見方を深め作品に織り込まれたよさや美しさを感じ取り、あこがれの感情をもつことや新たな価値に気付くことができるようにすることが大切である。

しかし、本校児童の実態をみると、作品を単に好き嫌いや印象だけで見ていることが多い。また、作品を進んで鑑賞する意欲が十分ではない児童も多い。これは、児童の生活のなかに多くの美術作品に触れる機会が少なかったことや、鑑賞のねらいや鑑賞の仕方を明確に示していなかったこと、作品というものは一面的な見方ではなく、いろいろな感じ方や見方ができるものだということに気付かせる手だてが不足していたことによると考えられる。

このような状況を改善するためには、実際に作品に触れたり、作品の動きをまねたり、ゲーム的な活動をしたりといった体験をとおして親しみながら鑑賞する活動や、作品に対する自分の感じ方や見方を深めていくように鑑賞したり、交流したりする活動を取り入れた対話型の鑑賞活動を行う必要がある。

そこで、この研究は、作品との対話型の鑑賞活動をとおして、小学校図画工作科において作品のよさや美しさを感じ取る力を育てる学習指導について明らかにし、小学校図画工作科の学習指導の改善に役立てようとするものである。

Ⅱ　研究仮説

小学校図画工作科の鑑賞の活動において、次のような活動を取り入れた対話型の鑑賞活動の指導を行えば、作品のよさや美しさを感じ取る力を育てることができるであろう。

1　実際に触れる、動きをまねる、ゲームをするという遊びをとおして作品に親しむ。
2　作品の造形的な要素に目を向け、自分の感じたことや考えたことを表現する。
3　作者についての情報と自分なりの感じ方や見方をもとに作者の思いを想像し、友だちと交流する。

Ⅲ　研究の内容と方法

1　研究の内容

(1)　小学校図画工作科において作品のよさや美しさを感じ取る力を育てる学習指導に関する基本構想の立案

(2)　作品との対話型の鑑賞活動についての指導試案の作成
(3)　題材「美術作品を見つめよう」の学習指導案の作成
(4)　題材「美術作品を見つめよう」の授業実践及び実践結果の分析と考察
(5)　小学校図画工作科において作品のよさや美しさを感じ取る力を育てる学習指導に関するまとめ
２　研究の方法
(1)　文献法　(2)　質問紙法　(3)　授業実践　(4)　観察法
３　授業実践の対象　一戸町立一戸南小学校　　第６学年　１学級（男子18名　女子９名　計27名）

Ⅳ　研究結果の分析と考察

１　小学校図画工作科において作品のよさや美しさを感じ取る力を育てる学習指導に関する基本構想
(1)　作品のよさや美しさを感じ取る力を育てることについての基本的な考え方
作品のよさや美しさを、作者の思いが込められた、表現方法の工夫（色や形の組み合わせ、材料の使い方、構図など）・発想の面白さ・作品と周囲の環境全体の雰囲気・作品のもつ形の面白さなどととらえる。
鑑賞の楽しさは、作品のよさや美しさを感じ取ることである。よさや美しさを感じ取るためには、作品を関心をもって見るとともに、自分なりの感じ方や見方を深めていくことが重要である。自分なりの感じ方や見方は、作品全体の印象をとらえた後、造形的な要素に目を向け、なぜ、そのような表現になったかを考えることや自分のイメージをふくらませることで深まっていく。深まった感じ方や見方をもった児童は、作者の思いをも感じることができるであろう。作者の思いを感じたうえで再度作品を見つめ直すことで、よさや美しさを感じることができると考える。
作品のよさや美しさを感じ取る力の構成要素を、【表－１】のようにとらえ、研究を進めるものとする。

【表－１】作品のよさや美しさを感じ取る力の構成要素と意味

構　成　要　素	意　　味
みる力	作品をよくみて特徴をとらえる力
くらべる力	作品の比較から表現の違いを見つける力
おもいえがく力	造形的な要素から作品に込められた作者の思いを想像する力

図画工作科の鑑賞の学習のおいては、作品を進んで鑑賞し、そのよさや美しさを感じ取り、感性を高めるとともに、それを大切にする態度を育てていくことが求められている。
作品のよさや美しさを感じ取ろうとする活動は、ものの本質やよさや美しさなどの価値あるものに気付く感覚を育て、深く感じ取るような感性を高め、豊かな情操を養うことになるものである。よさや美しさを感じ取れたとき、作品やその表現にあこがれの感情を抱く。また、美を追求する自分の存在にも気付く。作品のよさや美しさを感じ取れたことが、自分なりの感じ方や見方に自信を与え、さらに積極的な鑑賞活動をつくり上げていくものと考える。このような積極的な鑑賞の態度は、形のよさや美しさをつくりだす意思を育て、造形表現活動にも生かされていく。
したがって、作品のよさや美しさを感じ取る力を育てることは、児童の感情と意思の調和的な発達を図るとともに、芸術を創造し、それを愛好する豊かな心を育てることにもつながるものであると考える。
(2)　作品との対話型の鑑賞活動を取り入れた意義
作品との対話とは、作品の造形的な要素に目を向けて、「～が～している」「これは何だろう」と

表現されていることを見つけたり、疑問に思ったことを考えたりすることで作者の思いを受け止め、「自分だったら」「自分も～したい」という思いを返していくことである。言い換えれば、作品を仲立ちとして作者とコミュニケーションをとることである。

鑑賞の対象となるものは、我が国や諸外国の美術作品、自分たちの作品、デザインされた暮らしのなかの造形品、造形的に構成された環境、自然物などである。

対話型の鑑賞活動は、作品に対しての自分なりの感じ方や見方を深めていくことにつながる。感じ方や見方を深めるいうことは、視野の広がりとともに今まで気付かなかったことに目を向けながら、自分の心を解放していくことであると考える。図画工作科においては、それは、作品をとおして行われる。心が解放された児童は、作者の思いを感じることができるであろう。そして、このような経験を繰り返すことで、作者の思いを直感的に感じながら作品全体の印象をとらえることができるようになり、作品を見ることが好きになっていくであろう。

作品のよさや美しさを感じ取る力が育った姿を自分なりの感じ方や見方をもとに、作者の思いを想像しながら作品を見つめている姿ととらえる。

したがって、一方的な見方にとどまらず、すべての過程のなかで作品と向き合うことをとおして作者と鑑賞者のコミュニケーションを図りながら楽しく鑑賞する「対話型の鑑賞活動」は、よさや美しさを感じ取る力を育てるうえで意義のあることと考える。

(3)　作品との対話型の鑑賞活動の内容と進め方

作品との対話型の鑑賞活動は、「出合う」「対話する」「広げる」の三つの過程において、次のような内容と進め方で行う。

ア　「出合う」過程で

児童が作品と対話するためには、作品に親しむことが大切である。そのために、導入段階で、さまざまな作品をつかって、作品に実際に触れたり、作品のまねをしたり、遊び性を取り入れたアートゲームを行ったりして、鑑賞に対する抵抗感をなくす活動を位置付ける。この活動は、作品に対する抵抗感をなくすと同時に作品の多様性に気付かせることにもなる。

イ　「対話する」過程で

一つの作品の造形的な要素に目を向け、表現方法の工夫点や面白さ、不思議さなど、感動したり疑問に思ったりしたことを自分に問い直し、さらに自分の感じたことや考えたことを作者に語りかけていく活動を位置付ける。作品との対話をはずませるためには、進んで作品を探ろうとする気持ちが必要である。作品を探ろうとする気持ちは、何かしら引きつけられる印象を抱いた作品に出合ったときに生まれる。そこで、いくつかの作品のなかから自分の気に入った作品を見つけだし、その作品との対話を行うことができる場を設定する。自分が気に入った作品を前にして「自分はこの作品のどこに惹かれたのだろうか」「なぜ惹かれたのだろうか」と、理由を探ることで、表現されているもののよさや美しさがより鮮明に見えてくる。そして、「もし、この作品の人物だったら」「自分が作者だったら」という思いをふくらませながらシートやカードに描いてみたり、言葉を書き込んでみたりしながら、自分なりの感じ方や見方を深めていくであろう。

さらに、作品についての教師の簡単な説明を聞いたうえで、作者の思いを自由に想像し、カードに記述した後、その想像したことを友だちと交流する活動を取り入れる。

ウ　「広げる」過程で

交流活動の後、もう一度作品を見つめ直す活動を位置付け、作品のよさや美しさを十分に味わわせる。

これらの活動により、作品はそれぞれのとらえ方で自由に鑑賞できることだけでなくいろいろな感じ方や見方を認め合うことの楽しさまでも感じることができるであろう。また、作品のよさや美しさを自分のものとして感じることができるであろう。その結果、自分なりの感じ方や見方に自信をもち、次の鑑賞活動への意欲へと結びつくと思われる。

(4)　小学校図画工作科において作品のよさや美しさを感じ取る力を育てる学習指導に関する基本構想図

これまで述べてきた作品のよさや美しさを感じ取る力を育てる学習指導についての基本的な考え方に基づいて、その基本構想図を【図－１】のようにまとめた。

２　作品との対話型の鑑賞活動についての指導試案

(1)　手だてにかかわる実態調査及び調査結果の分析と考察

ア　手だてにかかわる実態調査の目的とその内容

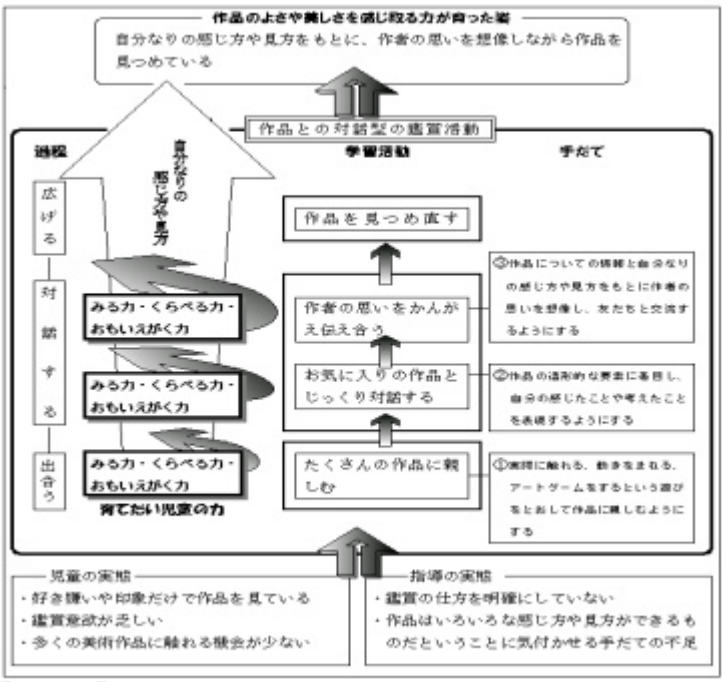
基本構想に基づいた授業を行ううえで配慮することを明らかにし、作品との対話型の鑑賞活動についての指導試案の作成に役立てるために、自分の考えを伝えることに関する意識の実態と自分の思いどおりに表現する能力の実態を把握する調査問題を作成し、７月中旬に調査を実施した。（実態調査の内容及び調査結果の分析と考察については本資料では省略）

イ　指導試案に生かす配慮事項

実態調査結果の分析から明らかになった手だてにかかわる配慮事項を【表－２】のようにまとめた。配慮事項は、指導試案の指導上の留意点のなかに生かしていく。

ウ　作品との対話型の鑑賞活動を取り入れた指導試案

小学校図画工作科において作品のよさや美しさを感じ取る力を育てる学習指導



【図－１】小学校図画工作科において作品のよさや美しさを感じ取る力を育てる学習指導に関する基本構想図

【表－２】手だてにかかわる配慮事項

手だて	配慮事項
実際に触れる、動きをまねる、アートゲームをするという遊びをとおして作品に親しむ。	・自由に話し合えるような雰囲気作りの工夫（①）
作品の造形的な要素に目を向け、自分の感じたことや考えたことを表現する。	・適切なアドバイスの工夫（②）
作者についての情報と自分なりの感じ方や見方をもとに作者の思いを想像し、友だちと交流する。	・自由に話し合えるような雰囲気作りの工夫（③） ・グループ編成の工夫　（④）

（配慮事項①～④の具体的内容は【表－３】の指導上の留意点と援助に示す）

【表－３】作品との対話型の鑑賞活動を取り入れた指導試案

過程	学習活動	工夫点	教師の指導と援助	手だてにかかわる配慮事項
出合う	**１ たくさんの作品に親しむ** ○　アートゲームを楽しむ カードを探す「カルタゲーム」・自由な観点で分ける「分類ゲーム」・「～らしさ」に合うカードを選び、ポイントを取り合う「ゲーム・ポイントゲット」・いろいろな考えを出し合って遊ぶ「大型カードクイズ」 ○　作品に触れたり作品のポーズや動きをまねたりしながら鑑賞する	・美術作品のポストカードや大型カードの活用 ・美術館（デザイン館）の利用	＜意欲の喚起＞ ・さまざまな作品のカードを用意する ＜作品理解への交流の場の設定＞ ・話し合いをとおして、作品はどういうものなのか考える場をつくる ・一人一人の多様な見方を認める ＜多様な表現の提示＞ ・触れてもよい作品を確認する ・気に入った作品を見つけだす活動を行わせ、なぜ気に入ったのか、その理由を考えることを確認する ・すべて鑑賞したうえで、理由を記入できるようにチェックリストを配布する	ゲームに入る前に話しやすい雰囲気をつくる（グループによる共同作業（ピアスケッチ）を行う）①
対話する	**２ お気に入り作品とじっくり対話する** ○　気に入った作品を選び造形的な要素と関連付ける ○　自分の感じたことや考えたことを表現する **３ 作者の思いをかんがえ、伝え合う** ○　作品の情報を得て、作者の思いを想像する ○　交流する	・シートやカードの活用 ・対話カードの活用 ・対話カードの活用	＜意欲の喚起＞ ・自分の好きな作品を自由に選んでよいことを伝える ＜観点の提示＞ ・「どこが」「どうして」という観点で自分自身に問い直してから表現するという手順を確認する ・多くの観点に気付くことができるように個別に助言する ＜自分なりの感じ方や見方を深める場の設定＞ ・「自分は～したい」「自分が～だったら」という観点で表現することを伝える ・表現の方法は、色を付ける、アレンジする、言葉を書くなど自由に選択できるようにする ・自分の考えを生みだすことで、作者の表現と比較し作者の意図に気付くことができるようにする ＜作品理解のための情報提供＞ ・作品の題名等を知らせ、手がかりの一つとして作者の思いを想像できるようにする ・作者の思いは、作者の気持ちや意図、メッセージであることをおさえる ・作者との対話をイメージすることで作者の存在を意識できるようにする ＜感じ方や見方の多様性を感じさせる場の設定＞ ・お互いのとらえ方を理解しようという態度で聞き合うことを確認する	立体で表現する児童にはポイントをアドバイスする② 作品の前で座談会形式で行う③ 少人数グループで交流した後全体に広める④
広げる	**４ 作品を見つめ直す** ○　もう一度よさや美しさを確かめながらみる	・付箋紙の活用	＜よさや美しさを味わう場の設定＞ ・友だちの考えも参考に、自分が感じたよさや美しさを確かめながら自分が選んだ作品をみることを知らせる ・これまでの活動を振り返らせ、他の作品のよさや美しさを味わいながら鑑賞することを確認する ・再発見したことや友だちのよいところは書き込めるように、付箋紙を用意する	

（注）１　太線の枠内は手だてにかかわる学習活動、工夫点、教師の指導と援助及び手だてにかかわる配慮事項である
また、学習活動の欄の網掛け部分は手だてである

に関する基本構想に基づき、前頁【表－３】のように指導試案を作成し、その指導試案の妥当性をみるために【表－４】のような検証計画を作成した。検証は、絵画作品を用いて気付いたこと等を記述する方法と、実践過程における抽出児の状況を観察する方法で行う。さらに、図画工作科の鑑賞の学習が児童にとって楽しいものであるか、手だてが児童にどのように受け止められたかをみるために【表－５】のような調査計画を作成した。

【表－４】 検証内容と方法及び処理の方法

検証項目	検証内容	検証方法	処理方法
作品のよさや美しさを感じ取る力の状況	① みる力 ② くらべる力 ③ おもいえがく力	質問紙による記述 （事前事後に実施） 実践過程における抽出児の観察 （実態調査をもとに、作品の見方に自信がもてない児童と作品を印象でみる児童の２名を抽出）	分類基準により記述内容を分析し、考察する ＶＴＲや観察の記録、シートやカードによる記述内容により分析し、考察する

【表－５】調査内容と方法及び処理方法

調査項目	調査内容	調査方法	処理方法
鑑賞の学習に関する意識の状況	① 鑑賞に対する意識 ② 作品との対話型の鑑賞活動に対する意識	①は事前事後に選択肢を設けた質問紙で実施 ②は事後のみ選択肢と記述を設けた質問紙で実施	①は評定尺度を設けた質問紙法によるχ^2検定（変化の検定）により分析し、考察する ②は記述内容を、観点により分類した後、分析し、考察する

３　題材「美術作品を見つけよう」の授業実践及び実践結果の分析と考察

(1)　授業実践の概要

指導試案に基づいて作成した学習指導案にしたがい、授業実践を行った。【資料－１】は、授業実践の様子の一部を抜粋し、まとめたものである。

【資料－１】授業実践の様子　（吹き出しは、造形的な要素にかかわった発言やつぶやきである）

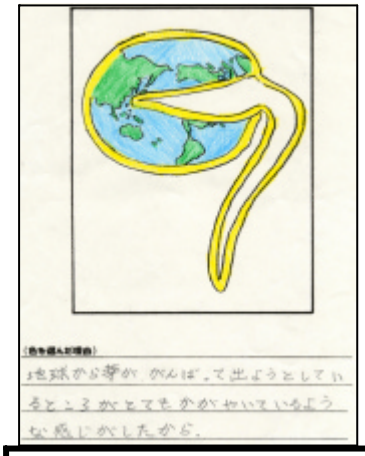
ウ　第３次　　ユーモアップミュージアムでイメージアップ

（自分の選んだ作品と対話させながら、自分の思いを表現させる活動）

過程	教師の働きかけと児童の反応
導入	T:ユーモアにあふれた福田作品15点を借りてきました。今日は、これらの作品を見て、イメージをアップさせ、自分の力をアップさせましょう。今日の学習は、名付けて「ユーモアップミュージアムへようこそ」。 T:まずは、自分の好きな作品を選びましょう。そして、どうして自分が気に入ったのかよく考えてみましょう。次に、「もし自分がこの作品の～だったら」とか、「自分が作者だったらこうする」というように考えてシートやカードにかいてみましょう。 T:何種類のカードを選んでもいいです。かき終わった人は、友だちのシートやカードも見ておきましょう。
展開	 明るい色にしたいなあ。この色に決めたっと。 作者は夜の雰囲気を出したかったのかな。でも、私は、反対に明るい世界にしよう。 今度は、どのシートにしようかな。色で表そうかな。 ここの黒い線を私は黄色にしてみたの。どう思う？ ぼくは、もっとスピード感をだしたいなあ。そのためには、線をもっといっぱい書き込もう。
終末	T:自分なりの感じ方や考え方で表現する学習を行いました。一人一人の感性が光るものばかりだったと感心しました。 是非、休み時間も利用して、作品や友だちの描いたものをみて楽しんでください。次の鑑賞の時間は、「作者と対話しよう」という活動を行います。それでは、お楽しみに。

子どもたちがいろいろ工夫したユーモアップシートやカードと福田作品

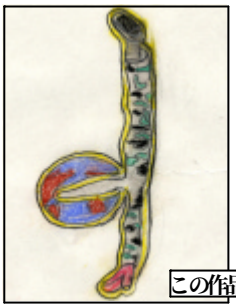
ユーモアップシートAの記述例



生命の輝きを感じたことから黄色を選んでいる

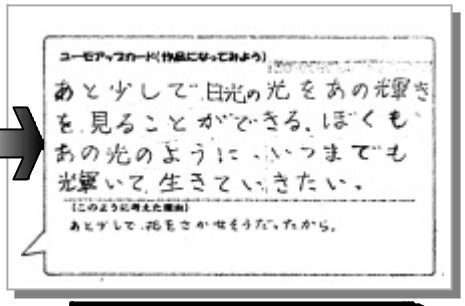
福田作品

ユーモアップシートBの記述例



この作品のタイトル「歩きたがる地球」

ユーモアップカードの記述例



生命の力強さと生きることへのあこがれを表現している

他の福田作品をうまく組み合わせて、新しい作品を創造している

児童の活動の様子

一教室をユーモアップミュージアムと名付け、福田作品を15点展示した。入館した児童は初めて見る作品に大変興味を示していた。お気に入りの作品が決まると、原画を元にアレンジするユーモアップシートや思ったことを吹き出しに書くユーモアップカードに素早く取りかかり、表現していた。シートやカードは自分で選択できるようにしたため表現に自信がない児童も安心して活動できた。はじめにカードを選択した児童は、カードにとどまらず、シートも選択し、描画や着色を楽しんでいた。

エ　第４次　　見つめて、感じて、味わおう

（作者の思いを想像しながら、作品を見つめ直し、作品のよさや美しさを味わわせる。）

過程	教師の働きかけと児童の反応
導入	T:前の時間に自分が選んだ作品をもう一度見つめ直して、どうして気に入ったのか、思い出して付箋紙に書いて貼りましょう。 T:では、どういうところが気に入ったのか発表してください。
展開	T:作品のそばにちょっとした情報があります。それも参考にしながら作者の思いを想像してみます。この対話カードを使って、作者と語り合うことで想像しましょう。また、友だちと作者の思いについて交流しましょう。その際、聞き終わったら感想を言ってあげましょう。 T:最後に、他の作品や友だちのシートやカードを見つめ直して、新たに発見したなら、対話カードに書いたり、友だちのいいところを見つけたなら付箋紙に書いて、そのよさや美しさを味わいましょう。

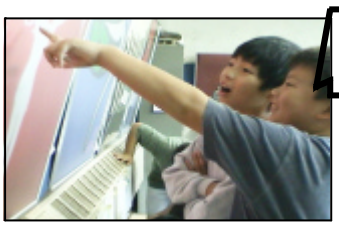
私は、形が整っていて、同じ形でも大きさがいろいろあるところが気に入ったから、この作品を選んだのよね。

塔の形のアイデアが面白かったことと、空が赤っぽくて、草が本物のように表現されているところが気に入りました。

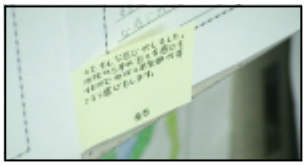
福田さん、音楽の楽しさを伝えようとしたのですか。ぼくはそう感じました。

今までのみんなの感想とちょっと違う感じ方で、面白かったです。

終



この翼をよく見てくださいだって。
ほら、翼が地球になってるよ。



この色を考えつくなんてすてきよね。
冬の世界をイメージしたこと、よくわかるなあ。

末

「鑑賞の学習について感想を発表してください。」

- **福田繁雄さんのことがよくわかりました。**
- **このような絵を見て、作者の気持ちがわかったような気がしました。**
- **全部の学習が面白かったです。**
- **前より鑑賞の力がついたと思います。**
- **シビックセンターやこの教室の作品を鑑賞して、絵や作品の楽しさがわかりました。**
- **ゲームをやったり、一つの作品をみんなで見て、感想を話し合うと、一人一人の思っていたことが違うということを感じました。**

(2)　実践結果の分析と考察

ア　作品のよさや美しさを感じ取る力の育成状況

作品との対話型の鑑賞活動を取り入れた図画工作科の学習において、作品のよさや美しさを感じ取る力の三つの構成要素がどのように育成されたかを５頁の検証計画にもとづいて調査問題を作成し、授業実践の事前と事後に調査を実施した。

(ｱ)　質問紙による記述内容の分析と考察

①　みる力の育成状況

【表－６】は、「みる力」の状況について事前事後調査結果をまとめたものである。児童が記述した内容を作成した分類基準（本資料では省略）である分類の視点に沿って、事前と事後に分けて表した。視点ごとに分類された記述内容の合計数の増減で「みる力」の育成を量的にとらえた。また、視点の広がりを数の増減で判断し質的にとらえた。

【表－６】みる力の状況　　Ｎ＝27(単位：人)

児童	分類の視点 形 前	形 後	色 前	色 後	線 前	線 後	組合せ 前	組合せ 後	大きさ 前	大きさ 後	明るさ 前	明るさ 後	構図 前	構図 後	雰囲気 前	雰囲気 後	技法 前	技法 後	合計 前	合計 後	増減	視点の数 前	視点の数 後	増減
1		1		1			2	1								1			2	4	＋2	1	4	＋3
2		2																2	0	4	＋4	0	2	＋2
3	1	2					2	2				1						1	3	6	＋3	2	4	＋2
4	3	1	2	3								1	1						6	5	－1	3	3	±0
5			1				2	1						1		1	1	2	4	5	＋1	3	4	＋1
6	1		1				1	1			1		2			2			5	4	－1	4	3	－1
7	1	1					2	2						2					3	5	＋2	2	3	＋1
8	1	3						4							2	1			3	8	＋5	2	3	＋1
9																	1	3	1	3	＋2	1	1	±0
10	1	2	1	3			2	2					1	2					5	9	＋4	4	4	±0
11		1						1						1					0	3	＋3	0	3	＋3
12		2	1					2					1					2	2	6	＋4	2	3	＋1
13		1					2	3	1				1	1					3	6	＋3	2	4	＋2
14		3	1	1				1					1	3					2	8	＋6	2	4	＋2
15																2	2		2	2	±0	1	1	±0
16				1													1	3	1	4	＋3	1	2	＋1
17								2					2	3					2	5	＋3	1	2	＋1
18				1		1	1									1		1	1	4	＋3	1	4	＋3
19	1						1	1					1	3					3	4	＋1	3	2	－1
20		1		1			1	1					3						4	3	－1	2	3	＋1
21			1	2		1	2									1	1	1	4	5	＋1	3	4	＋1
22							1	2					1						2	2	±0	2	1	－1
23				1			1					1				1	1		2	3	＋1	2	3	＋1
24				1			1							1					1	2	＋1	1	2	＋1
25		1					1	1							1	1			2	3	＋1	2	3	＋1
26							2	2							1	2			3	4	＋1	2	2	±0
27	1	1		1		1							1					1	2	4	＋2	2	4	＋2
計	10	22	8	16	0	3	24	29	0	1	0	4	15	17	4	13	7	16	68	111	増22	51	78	増19
増減	＋12		＋8		＋3		＋5		＋1		＋4		＋2		＋9		＋9		＋53					

【資料－２】具体的な記述例　　視点の広がり

児童	事前の記述内容	事後の記述内容
記述が増えなかった児童の記述	・水の上で何かをしている。(組合せ) ・山の近く（構図） ・山がとんがっている（形） ・人が黒い（構図） ・一カ所にまとまっている（構図）	・上にいる人は自分の家のものを燃やしている(どうして燃やしているのかな)(組合せ) ・上にいる人はなにかさびしそう（雰囲気） ・下にいる人は楽しそう（雰囲気） ・暗い感じ（明るさ）

【表－６】をみると全体としては、「形」「色」「組合せ」「構図」「雰囲気」「技法」での記述が増えていることがわかる（◯印参照）。また、事前では記述がみられなかった「線」「大きさ」「明るさ」の視点についての記述がみられたことから、作品を見る視野が広がったことがわかる（‾印参照）。個人ごとの変化をみても記述が増えた児童が22名いる。記述が増えた児童の多くは視点の広がりもみられた（↑印参照）。

一方、記述数が減ったり、増減がみられなかったりした児童が５名いた。しかし、事前にはなかっ

た「雰囲気」や「明るさ」の視点が事後の記述内容から読みとれた(【資料－2】参照)。作品をみる視点が変化していることから、質的にもみる力は育成されたといえる。これらのことから、みる力は育ったと考える。これは、「出合う」過程で、カード等を用いてアートゲームを楽しく行えたことや地域のデザイン館の作品が児童の興味を引くものであったこと、そして、作品に実際に触れたりまねをしたりしながら鑑賞したことが作品への関心を高め、みる意欲を喚起したものと思われる。また、アートゲームのなかで分類の根拠を示したことや作品を選んだ際に気に入った理由を探ることで、造形的な要素に目を向けたことにもよると思われる。

② くらべる力の育成状況

「くらべる力」の状況について、「みる力」と同様に行った結果、くらべる力が育ったことがみとめられた。これは、造形的な要素に目を向け、自分なりの感じ方や見方を深める場を設定したことや友だちとの交流により作品に対する感じ方や見方の違いを感じたためと思われる。

③ おもいえがく力の育成状況

【資料－7】おもいえがく力の状況 N=27 (単位:人)

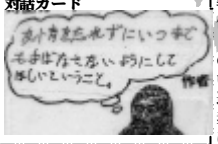
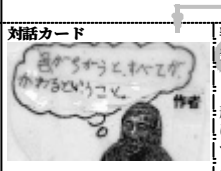
	事　前	事　後
作者の思いの記述	22	25
理由の記述	16	27

【表－7】は、「おもいえがく力」の状況について事前事後調査結果をまとめたものである。「おもいえがく力」の育成を児童が想像した作者の思いについての記述の有無と想像した理由の記述の有無によりとらえた。その結果、事前は作者の思いを記述できなかった児童も、作者の思いを想像しようとしていることがわかる。これらのことから、おもいえがく力が育ったと考える。これは、「対話する」過程でユーモアップシートやカード、そして作者の思いを想像させるための対話カードを用いたことや多様な感じ方や見方に触れ、視野を広げられるように、友だちと作品の見方や考え方を交流する場を設定したためと考える。

イ 実践過程における抽出児の状況の分析と考察

検証計画にしたがって作品のよさや美しさを感じ取る力の育成状況を調べるために、【資料－3】のように実践過程における抽出児2名の状況の分析と考察を行った（掲載は一部）。その結果、どの過程においても、判断基準（本資料では省略）のBを超える記述内容や様子がみられたことから、三つの力はついてきたといえる。

【資料－3】抽出児の分析結果 (★はみる力、☆はくらべる力、◇はおもいえがく力にかかわる行動である)

対話する	広げる
ユーモアップミュージアムでイメージアップ	見つめて、感じて、味わおう
入室時 理由 「クリップが刺さってる」と目に飛び込んだ作品について驚きを口にする。また、「あれ、シビックセンターにあったよね。」と類似した作品を見つける★ **作品選び** いち早くユーモアップシートAを取り、絵の具を用意し始める。選んだ作品は、入室時に驚きを示した作品 **表現** 「どんな色にしようかな。」とつぶやきながら絵の具の色と作品を見比べている☆◇	**を付箋紙に記述** 自分の選んだ作品を何度も見つめ直した後、「何枚でもいいんでしょ。」と友だちに確認しながら付箋紙3枚に記述する（友情を感じる・色づかいがいい・ありえなそう）★ **作者との対話** 作品の情報カードをみて、FRIENDSHIPが友情の意味だと知ると、うなずきながら「絶対離れないという強い友情を感じるんだ。」と友だちに笑顔で説明し対話カードに記述する◇ **交流** 二人組で交流し自分が先に発表をするといって始める **見つめ直す** 友だちのコメントを熱心に読んだり、作者の技法について友だちと語り合ったりする
シートやカード / **判断場面③** / **判断場面④** 作品を印象で選んでいたがシートに表現することで意図をもって表現するようになった 色という造形的な要素に目を向けていたことから **判断B** 元気が出そうな色にしたという自分なりの感じ方や見方で表現していることから **判断B**	**対話カード** / **判断場面⑤** / **判断場面⑥** / **判断場面⑦**  色だけでなくクリップや友情という言葉から作者の思いを想像している 作者の思い・色・発想の面白さという複数の造形的な要素に目を向けて作品を選んでいることから **判断A** 想像した作者の思いをカードに書いていることから **判断B** 作品や友だちが表現したもののよさや美しさを見つけて表現していることから **判断B**
入室時 理由 じっくりと部屋中の作品をながめ渡す★ **作品選び** 「抜けてる感じ」「これ、地球だよ。」「もやしみたい。」と一つ一つ作品のなかで見つけた物や感じたことを口にしながら、すべての作品を友だちと見て回る★☆ 一番はじめに見に行った作品を選ぶ **表現** 「何か抜けてる感じがするなあ。」とつぶやき、その後、「あ、そうだ。」と何か思いついた顔をしてユーモアップシートBに描き始める☆◇	**を付箋紙に記述** 付箋紙が足りなくなり、つなげながら一文を記述する（犬からはんてんが出て面白いし、色づかいが白と黒なのですごいと思った）★ **作者との対話** 作品の前で、「さかさにみると・・・」というカードの情報をみた後、かなり悩む 情報にとらわれなくていいことを告げると、しばらくしてから「あっ」とつぶやき、カードの記述を始める **交流** 友だちの発表内容のよいところについて感想を述べる☆ **見つめ直す** 「～くんすごい。」と友だちのシートの表現を賞賛しながら見て回る
シートやカード / **判断場面③** / **判断場面④** 作品から感じ取ったことをもとに、さらにイメージを広げ自分なりの表現をしている アイデアという造形的な要素に目を向けたことから **判断B** 何かが抜けている感じがしたから骨にしたという自分なりの感じ方や見方で表現していることから **判断B**	**対話カード** / **判断場面⑤** / **判断場面⑥** / **判断場面⑦**  色が反転することで見方が変わることから、テーマ性を引きだしている 発想の面白さ・色という複数の造形的な要素に目を向けて作品を選んでいることから **判断A** **(付箋紙)** 想像した作者の思いをカードに書いていることから **判断B** 作品や友だちが表現したもののよさや美しさを見つけて表現していることから **判断B**

イ　鑑賞の学習に関する意識の状況

(ｱ)　鑑賞の学習に対する意識の変容状況

【表－８】は、鑑賞の学習に対する意識調査の結果をχ^2検定（変化の検定）によってまとめたものである。設問１から設問４までは、有意差が認められる。このことから、鑑賞への意欲や作品を見るときの意識が高まったといえる。設問５と設問６においては、有意差が認められない。これは、事前から作品を鑑賞した後、自分の作品作りに生かそうとする意識が高かったためであると思われる。さらに、マイナス反応であった児童が全員プラス反応に変わっていることから、自分の表現活動へ生かそうとする意識は育ってきているといえる。

【表－８】鑑賞の学習に対する意識の変容状況

Ｎ＝27（単位：人）

調査内容	事後／事前	＋	－	合計	χ^2検定
①　あなたはふだんの生活の中で、絵や立体を進んで鑑賞しようと思いますか。（鑑賞への意欲）	＋	１８	０	１８	6.13 ＊
	－	８	１	９	
	合　計	２６	１	２７	
②　あなたは、一度見た絵や立体などをまた鑑賞したいと思いますか。（鑑賞への意欲）	＋	１５	０	１５	8.10 ＊
	－	１０	２	１２	
	合　計	２５	２	２７	
③　あなたは、作品を見るときに、「自分がこの絵の人物だったら。」というように考えながらみますか。　（作品をみるときの意識）	＋	１０	１	１１	8.33 ＊
	－	１１	５	１６	
	合　計	２１	６	２７	
④　あなたは、作品をみるときに、「作者は、こんな気持ちで製作したのだろう。」というように考えながらみますか。　（作品をみるときの意識）	＋	９	０	９	12.00 ＊
	－	１２	６	１８	
	合　計	２１	６	２７	
⑤　あなたは、絵をみたあと、自分が絵を描くときに生かそうと思いますか。（自分の表現に生かそうとする意識）	＋	２５	０	２５	0.50
	－	２	０	２	
	合　計	２７	０	２７	
⑥　あなたは、立体作品などをみたあと、自分の作品づくりに生かそうと思いますか。（自分の表現に生かそうとする意識）	＋	２４	０	２４	1.33
	－	３	０	３	
	合　計	２７	０	２７	

〔注〕１　事前調査は９月３日、事後調査は９月１８日に実施したものである。
２　各調査内容の意識をアイウエの４肢選択で問い、ア・イはプラス反応でありアはイより強い反応である。また、ウ・エはマイナス反応であり、エはウより強い反応である。
３　＊は有意水準５％で有意差が認められたことを示す。
４　χ^2検定に用いた公式は次に示すとおりである。

$$\chi^2 = \frac{(b-c)^2}{b+c}$$　但し、$b+c \leqq 10$のとき　$$\chi^2 = \frac{(|b-c|-1)^2}{b+c}$$

b：(－) → (＋)　　c：(＋) → (－)

(ｲ)　作品との対話型の鑑賞活動についての意識の状況

作品との対話型の鑑賞活動について児童はどのような受け止め方をしたのかの調査を行った。その結果をまとめたものが、【表－９】である。【表－９】をみると、対話型の鑑賞活動は児童にとって、満足のいくものであったことがうかがえる。【表－10】は、学習全体をとおしての感想を分類したものである。【表－10】をみると、作品をみることの楽しさや作品の多様性に関するものや自分の力に対する自信を感じている感想が多いことがわかる。このことは視野の広がりとともに心の解放にもつながったと考える。

【表－９】作品との対話型の鑑賞活動に対する意識Ｎ=27（単位:人）

	項　目	のべ人数
親しむ活動	楽しかった（満足感）	２３
	見方が深まった（有用感）	７
	またやりたい・関心が高まった（意欲・関心）	５
	びっくりした（意外性）	１
	～をしてみたい（発展性）	１
表現する活動	楽しかった・できた・（満足感・達成感）	１３
	自分の気持ちが出せた（開放感）	７
	難しかった（困難性）	５
	見方が深まった（有用感）	４
	表現力が高まった（満足感）	４
	友だちの考えが分かった（共感的態度）	１
交流する活動	作品はいろいろな見方ができる（作品の多様性）	１４
	違う考えの友だちを認めることができた（共感的態度）	９
	楽しかった（満足感）	６
	自分の鑑賞の力が高まった（満足感）	２
	自分を理解してもらえた（存在感）	１
	難しかった（困難性）	１

【表－10】作品との対話型の鑑賞活動を取り入れた学習に対する意識

Ｎ＝27（単位：人）

項　目	のべ人数
みることが楽しかった（満足感）	１７
またやりたい・本物の作品を見れた（意欲・関心の高まり）	１４
自分の力が高まった（満足感）	８
作品は素晴らしいと思った（作品のよさや美しさへの気付き）	５
作者の思いがわかった（見方の深まり）	４
友だちの見方をなるほどと思った（共感的態度）	４
線や色などに気をつけてみるとよくわかる（造形的要素への気付き）	３
作品はいろいろな見方ができることに気付いた（作品の多様性への気付き）	３
表現することが楽しかった（満足感）	２
～していきたい（向上心）	１
工夫できた（シートやカードの有用感）	１
難しかった（困難性）	１

４　小学校図画工作科において作品のよさや美しさを感じ取る力を育てる学習指導に関する研究のまとめ

これまで指導試案に基づいた授業実践を行い、実践結果の分析と考察をとおして、その妥当性を検討してきた。その結果、成果と課題についてまとめる。

(1)　成果

ア　ポストカード等を活用して、たくさんの美術作品を手軽に楽しく鑑賞するアートゲームは、何度もカードを見返すことができるなど作品への関心を高めるとともに、さまざまな造形的な要素に目を向けさせることができ、みる力やくらべる力を育てるうえで効果があった。

イ　地域のデザイン館を利用し多様な作品に出合わせた後、実際に作品に触れたり、動きやポーズをまねしたりする活動は、児童が作品を自然に色々な角度から見つめたり、再度見つめ直したりできるため、みる力を育てるうえで効果があった。

ウ　ユーモアップシートやカードを活用して自分の感じたことや考えたことを表現する活動は作品の造形的な要素に目を向けることができ、みる力やくらべる力を育てるうえで効果があった。

エ　作者の表現とは違う表現を楽しんで試みたり、作品のなかの人物の気持ちになって想像したことを自由に表現したりすることは、自分なりの感じ方や見方を深め、くらべる力やおもいえがく力を育てるうえで効果があった。

オ　作者についての情報を与えたり、作者の思いを想像するために対話カードを活用したりしたことにより、作者の存在を強く意識させることができた。そのうえで、想像したことを友だちと交流し、違う感じ方や見方を認め合う活動を位置付けたことは、おもいえがく力やくらべる力を育てるうえで効果があった。

(2)　課題

ア　導入段階で、作品についての話し合いの時間を確保する。（授業の様子より）

イ　表現する活動を取り入れる際の抵抗感をなくす工夫をする。

ウ　児童の実態に合った作品の選定をする。

以上のことから、課題として考えられることに示している事項を考慮する必要はあるものの、小学校図画工作科の学習指導において、作品との対話型の鑑賞活動を取り入れることは、作品のよさや美しさを感じ取る力を育てるのに効果があると考える。

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

1　研究のまとめ

本研究は、作品との対話型の鑑賞活動をとおして、作品のよさや美しさを感じ取る力を育てる学習指導を明らかにし、小学校図画工作科の学習指導の改善に役立てようとするものである。授業実践の結果に基づき、構成要素である「みる力」「くらべる力」「まとめる力」について検証を行った結果、本研究の仮説が有効であることが確かめられた。また、作品のよさや美しさを感じ取る力が育つときには、鑑賞する意欲も大きくかかわっていることが調査結果より明らかとなった。

2　今後の課題

本研究では、小学校図画工作科における作品のよさや美しさを感じ取る力を育てる学習指導について小学校６年生を対象にその在り方を明らかにすることができたが、今後は、さらに児童の発達段階に応じた対話型の鑑賞活動の在り方と鑑賞活動と表現活動との関連について明らかにしていく必要がある。

【主な参考文献】

アメリア・アレナス著	「みる　かんがえる　はなす」	淡交社	2001年
上野行一監修	「まなざしの共有」	淡交社	2001年
神吉脩・竹井史編著	「楽しくできる図工科鑑賞の授業」	明治図書	2001年
板良敷敏・三澤正彦編著	「小学校新学習指導要領実践・新しい教育課程と学習活動の実際（図画工作）」	東洋館出版社	1999年